Y05a　市民科学で読み解く国内外の「光害」研究史

大西浩次（国立長野高専）, 大西昴（東北大）

「市民科学」= “Citizen Science” の源流として, 科学研究のプロ (職業研究者) とアマチュア (市民研究者) の分離以前 (19 世紀) の Naturalist と呼ばれるアマチュアの活躍と，1960〜70 年代の欧米におけるプロが積極的に社会問題に参加する「市民科学運動」等が挙げられる．光害に関する社会的事象として，日本では，1972 年に結成された「日本星空を守る会」によるサーチライト停止運動などが知られている．前回,「日本星空を守る会」を「市民科学」の文脈で読み解くと，どの様に位置づけられるか，及び,「光害」や”light pollution” に関する国内外の研究がどの様に誕生してきたのかを，1 次資料やデータベース（NASA/ADS，国立国会図書館サーチ，ジャパンサーチ，主要新聞データベース）上で調査した．その結果，日本では，アマチュア天文家を中心とした光害の啓発活動や調査が，海外に比べて早い時期にスタートしていること，そして，その活動がまさに「市民科学」であったこと，しかし，組織力の弱さなどにより大きなトレンドが作れなかったことなどを紹介した．

では，現在の光害研究・啓発の大きなトレンドの起源は何であろうか．そこで，1970 年代初頭のアメリカやカナダでの光害対策としての天文台移設計画とそれに伴う天文学者による科学運動 (アリゾナ大学天文台 “A Guide for Businessmen and the General Public”) や，市民参加型光害調査 (RASC による “Sky Brightness Program”) などを挙げてみる．そして，これらの活動から 1988 年の IAU Colloquium 112 への動きを整理し，現在の光害対策ガイドラインへの流れを明らかにする．その中で，1987 年の環境庁のプレ星空継続観察やその後の全国星空継続観察なども調査する．同時に、これらを起点として現在までの「光害」や”light pollution” の研究動向をデータベースなどの数値からも明らかする．さらに，現在に至る諸活動を「市民科学」の文脈で読み解いてみる．